

# 「遺伝子と文化の対立」としての現代の病

2025年3月7日

学長 田林 暁一

戦後の医学研究は「ヒトゲノム・プロジェクト」に象徴されるように分子生物学的な手法をベースにいわばマイクロの方法で病気のメカニズムを解明・治療することを目指すものであった。要素遺伝主義的な「バイオメディカルモデル」と呼べる方向である。しかし、疾病構造の大きな変化の中で、果たしてそうした方法論のみで十分な成果があがるかという疑問もまた生じてきている。

ここで重要となってくるのはそうしたマイクロの視点のみならず、人間と環境との関係をよりマクロな視点から捉え、心理的な要素も含めて病気というものをトータルな視点で捉えていく「エコロジカルモデル」とも呼べる方向である。

こうした視点では病気というものは人間の作り上げてきた様々な文化（特に産業化以降の急速な生活や環境の変化、新たな化学物質など）が人間のもつ遺伝子（数万年前に形成されたものとはほぼ不変）に対してあまりにも急速に変化したためと理解されている。代表的な疾患としては、機能性ディスペプシア（ストレスが関与する慢性的な胃の不調）、うつ病、糖尿病やメタボリックシンドロームなどの生活習慣病等がある。オックスフォード英語辞典の出版社は、2024年の単語に「脳の腐敗、Brain Rot」を選んだと発表した。オンラインコンテンツの過剰消費による精神状態や知的能力の低下と定義されている。これも1種の現代病の一つで、自分の頭で考えなくても種々の機器が代わって、より早く、正確に、スマートに、そして膨大なデータの提供と解決策を与えてくれる。

パスカルが「人は考える葦である」と述べたが、考えるという人の特性が失われつつある。一方、AIができることはすべてAIに任せ、AIにできない人との真の触れ合い、社会性の育成、また複数の目的から構成される多目的最適化問題での良い意思決定するための歴史、社会、科学等の多くの学びを求めて行くべきであるとする考えもある。進歩的な機器に離れず、遅れず、追って行き、進展する機器への興味と試行への取り組みを忘れず、共生して行くことが大事と考えている。ただ、AIとの共生には「シン読解力」が必要であるともされ、そのトレーニングも重要となる。それらが現代病の最大の治療法となるように思う。